

第3回

# 生ごみリサイクル交流集会 in 多摩

2011年6月11日  
日野市役所会議室

ダイジェスト版



## 生ごみを地域で活かそう！ 地域の資源循環ネットワークをつくらう！

朝からの雨もお昼にはすっかり上がり、日野市役所の会場には、1時間以上も前から待ちかねた参加者が続々と集まりました。この日に至るまでには、一時期、原発事故による計画停電で首都圏が大混乱し、果たして本当に開催できるのだろうかという心配もありましたので、無事当日を迎え、また、会場に詰めかけたたくさんの皆さんに、ホッとする思いでした。

第3回目となる今回は、ごみかんの実行委員会だけの主催でなく、「ひの・まちの生ごみを考える会」との共催でした。午前のコミュニティガーデン「せせらぎ農園」の見学や会場準備など、日野市民ならびに、後援いただいた日野市の職員の皆様のご協力が無事に開催することができました。3時間の交流集会では、多摩地域4団体、小田原市と北本市の2団体の先進的な取り組みから、たくさんのヒントやエネルギーをいただきました。終了後も、しばらく交流の輪があちこちにできて、今後につながっていくことが確信できた一日でした。



### 開会挨拶

馬場 弘融 日野市長

日野市では、日頃からごみや水、みどりなど、環境にやさしいまちづくりに取り組んでいるところです。多摩地域はごみに関心が高く、日本全国の中でもごみの排出量が少なく、リサイクル率が高い地域です。しかし、まだまだ生ごみやプラスチック系のごみを減らしていかないといけない。プラスチックごみは拡大生産者責任が必要で、メーカーや流通大手にお返しして、我々市民や行政が処理する量を減らして

いくことが必要と、常々申し上げています。

日野市では、2000年度にごみ改革をしてごみが半減しましたが、可燃ごみの半分が生ごみなので、これを減らすことがポイントです。ごみ改革の時に、「ごみゼロ社会」を作ろう、と申し上げてきたことが、最近では理解されるようになってきました。せせらぎ農園でやっているように、生ごみをまず分けていただき、少しずつ関わる人を増やし、できるところから、100人、200人と広げていくことが大事だと思っております。



## 「官民一体のごみ減量の取り組み」

北本市ごみ減量等推進市民会議 浅野 昭八 さん

### これまでの歩み

北本市には焼却場や最終処分場がありません。可燃ごみも不燃ごみも、よそに頭を下げてお願いしなくてはならないのです。また焼却場を巡っても、2市1町で揺れ動いた歴史があります。

そういう環境の中で、私たちごみ減量等市民会議は、ごみ減量を官民一体で進めるために平成7年7月、155人の会員と100人のごみ減量等推進員で活動開始し、今年4月現在で、587名の会員がいます。会員は、市民ボランティア、推進員、関係業者、行政で構成されています。

### 市民会議の組織と活動

市民会議では、総務広報・リサイクル・IT・農園管理・減量の5つの専門委員会と、111の自治会から推薦されたごみ減量等推進員が、8つの支部で行政と連携協働して活動しています。事務

局は市民経済部くらし安全課にあります。

紙ごみ・プラごみ・生ごみなどの削減活動を、16年間やってきましたが、可燃ごみの70%は生ごみと紙ごみ。今年度は、7万市民の意識改革をさらに進めるために、3～5年間は、ごみ量を削減した支部に、削減量に見合ったごみ処理費用相当分を報償金として還元するよう、9月市議会に提案する予定です。

### 市民農園管理・運営委員会の活動

農家から農地10ヶ所(約1町4反歩)を借りて、約215名が利用しています。そこでは主にコンポスター(半額補助)を使い、生ごみをごみに出さないことが条件で、発足当時は支部の役員が説明して回りました。

委員会では、この農園の管理、募集・更新手続きの他、講習会(生ごみ堆肥化、野菜の作り方、EMぼかしの作り方)を実施しています



## 「3つのLowを実践」

小田原市生ごみ堆肥化検討委員会 笹村 出 さん

私は25年間、自然養鶏の仕事をしており、食品残渣、例えば給食の生ごみを発酵させて餌にしています。

一方で「あしがら農の会」で、40ヘクタールの農地を500人のメンバーで農作業をしているのですが、その仲間の一人が、ダンボールコンポスターを勤めていました。また、農の会のメンバー

が市長選に立候補し、生ごみの堆肥化をマニフェストに掲げて当選したので、そのこともあって、小田原市で生ごみを堆肥化する検討委員会が21年7月に設置され、私も応募しました。

### 検討委員会での検討と実践

具体的に行動を起こし、次につなげていくように

と考えました。考え方の基本は「3つの<sup>ロー</sup>Low」です。

- ① Local (ローカル:小地域で、排出地処理)
- ② Low- Technology (ローテク:単純な技術、微生物による分解発酵が基本)
- ③ Low-cost (ローコスト:最小限の設備、低ランニングコスト)

#### \*家庭での取り組み

各家庭で簡単に取組めるダンボールコンポストを中心とした自家処理の普及を行っています。22年度に1000世帯を募集し、ダンボールコンポストの基材を無料提供したところ、1ヶ月で1000世帯が応募してくれました。2年目の今年度もすでに現在500世帯以上が応募してくれています。

#### \*地域での取り組み

たまたま大型生ごみ処理機を設置している小学校があり、すでに地域の数世帯がこの処理機を利用していた事や、検討委員会の中にその小学校の教員がいて協力が期待できることから、モデル事業として位置づけ、参加する家庭を拡大させています。

### 楽しく継続するために

#### \*「生きごみサロン」の開催

毎月、生きごみサロンを開催して、50～60名、最近では80名ほどの参加者があり賑わっています。

初心者・経験者を問わず参加できる楽しい集会にしています。講師を呼んで生ごみ堆肥化講演会をしたり、生ごみ堆肥を使ってキャベツとブロッコリーを育てて、野菜の苗コンテストをやり、優良者を表彰したりしています。

#### \*情報伝達の充実

生きごみ通信をサロンの開催に合わせて発行しています。参加者の意見やアイデア多く載せ、情報共有を積極的に行っています。配布場所は、市役所支所、銀行、郵便局、スーパーなど。

#### \*相談・普及体制の充実

「生きごみクラブ」を設立し、相談・フォロー体制の充実を図っています。

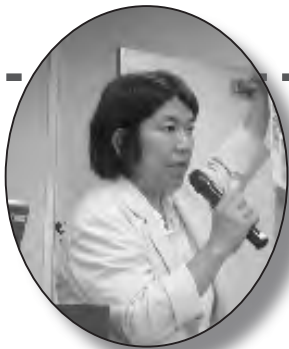
#### \*運営体制の強化

地域連絡所26ヶ所を設置し、通信の配布、交換基材の受け渡し、相談に協力してもらっています。

#### \*生ごみ<sup>ほじょう</sup>実験圃場の開設

ダンボールコンポストの堆肥で野菜の栽培の実証実験に取り組んでいます。

現在の活動は第一ステージ、今後5年ほどで78,000世帯の1割が参加することを目標にしています。



## 報告3

### 「ダンボールコンポストの普及活動」

エコサイクル・みたか 山田 和美 さん

活動のきっかけは、2009年の家庭ごみ有料化でした。高いごみ袋(40ℓ袋75円、10ℓ袋18円)を使いたくないので、生ごみの減量に着目し、ダンボールコンポストに行き着きました。

#### 活動内容

##### \*講習会

パンフレットを使って、講習会で広げていく活動をしています。3年で15～16回、300名ほど

に講習しました。ピートモスともみ殻くん炭を基材にしています。やっていただいた方には「ごみ出しの回数が減った」「小さなごみ袋ですんだ」と好評です。

#### ・各種イベントに参加

#### ・できた堆肥の回収と活用

堆肥の使い道のない人には、持ってきてもらう、または私が取りに行く、ということをしています。

それを市の公園の花壇の植え替えの時に使ってもらったり、NPO「花とみどりの会」で使ってもらったりしています。

#### ・「はじめてキット」の作成・販売

すぐに気軽に始められるよう、ダンボールコンポストの材料一式のキットを販売。

## 今後の活動

### \*「自由研究にはコレ！」講習会の開催

夏休み子どもたちの自由研究に、と講習会を予定しています。

### \*DVDの活用

武蔵野・三鷹市民テレビ局の「生ごみを資源にしよう」という番組作りに関わったので、講習会でそのDVDを上映して、啓発する予定です。



「エコサイクル・みたが」のパンフレット



## 報告4

# 「生ごみ分別・資源化モデル事業の開始」

立川市ごみ対策課 鎌田 純文 さん

立川市は21年度に緊急非常事態宣言だということで、トップダウンで「燃やせるごみの50%減量しましょう」と決めました。その中で、23年2月から、生ごみ分別・資源化モデル事業を始めました。

## 事業開始の背景

22年5月策定の一般廃棄物処理基本計画で中長期事業(27年～36年)の中に「生ごみの分別収集・資源化」が掲げられています。

焼却炉は3炉のうち2炉が老朽化しているため、ごみの組成調査で燃やせるごみの40%を占める生ごみを減らす必要がある、ということでモ

デル地区で実施・評価検証し、生ごみリサイクルシステムの実効性を追求することになりました。

## 事業の詳細

23年2月から26年3月までの3年2ヶ月間、都営大山団地(1200世帯)の約半分、1～13号棟の550世帯が対象です。

取組み内容は…

- ①水切りした生ごみを分別専用バケツに入れる。
- ②収集日(火・金曜日)の正午までに集積所の収集用バケツに入れる。
- ③生ごみ収集車で収集後、一次処理したものを剪定枝チップと混ぜて堆肥の素を作る。

一次処理は、学校給食などの生ごみを委託している事業者をお願いしています。

## 事業費

22年度9月補正予算で、消耗品費207万5千円(水切り用具、分別バケツ、清掃用具)備品購入費100万円(収集バケツ)、収集処理委託料2か月分65万7千円。23年度当初予算で、収集処理委託料12ヶ月分393万8千円。合計767万円の経費がかかります。



## 報告5

### 「食物資源循環モデル事業のその後」

小平市ごみ減量対策課 菅家 幸樹 さん

昨年の交流集会の時にはモデル事業の実施前だったので、事業計画や予定を発表しましたが、その際、「食物資源(生ごみ)」と表記していました。今はだいぶ浸透してきたので、今年度は「(生ごみ)」は取って「食物資源」です。庁内では「生ごみ」という言葉は禁句です。

## 事業の詳細・実施状況

22年7月より事業開始し、市内の4分の1のエリアを対象に、200世帯を募集。22年度は23グループ172世帯が参加して、1週間で250kg、3月までの累計で約10tが資源化されました。

## 事業の流れ

- ① 5世帯以上のグループをつくり、集積所を決める。
- ② 市が貸与した専用バケツ(抗酸化バケツ)に1週間分の食物資源を溜める。
- ③ 毎週水曜日の朝8時までに、専用バケツで集積所に出す。

## 4ヶ月経過して…

最初は異物が混じりましたが、職員が、朝7時にモデル地区に出向き、直接生の声を聞く中で改善してきました。

組成分析結果では、2年前の火曜日のデータと比較して、可燃ごみが8.2%減量、生ごみ率が4.3ポイント削減できています。

大事なのはこれからです。組成分析や排出量調査を継続し、相談会や毎月のパトロール・清掃を行い、広報やホームページで報告・啓発・アピールをしていきます。

- ④ 収集業者が中身だけを回収。
- ⑤ 回収後、市外の堆肥化工場へ搬入。
- ⑥ 一次処理して剪定枝チップと混ぜて発酵させ堆肥(未熟成)が完成。
- ⑦ 堆肥は市で一部購入し、参加世帯やイベントで無料配布。

## アンケート結果

172世帯のうち130世帯から回答があり、「参加してよかった」が約9割でした。

## 今後の取り組み

23年7月より市内2分の1強のエリア400世帯に拡大予定で、6/10現在47グループ368世帯の申込みがあります。24年度は600世帯に拡大する予定です。3年間のモデル事業で市内全域への拡大の可能性を検証します。

また、堆肥を使った実験栽培を試験圃場で行い、将来的には出来た堆肥を農家が使用し、野菜を市民が購入する循環を目指します。



## 「枠を超えて広げよう、生ごみリサイクル」

ひの・まちの生ごみを考える会 佐藤美千代 さん

これまでの2回の交流集会では「まちの生ごみ活かし隊」のコミュニティ・ガーデンの活動を紹介してきたので、今回は上部団体の「ひの・まちの生ごみを考える会」の活動についてお話しします。

「ひの・まちの生ごみを考える会」の月1回の会合には、ごみゼロ推進課の職員さんが課長以下3名参加してくれています。そして、そこで決まったことは、市と協働で進めています。

### 家庭内循環を広げよう

#### ＊生ごみリサイクルステッカー

生ごみ仲間を「見える化」してインセンティブを高めるため、生ごみリサイクルに取り組んでいる人にステッカーを配布し、玄関に貼ってもらいます。昨年度の累計は599世帯です。

#### ＊3回連続講座によるサポーターの育成

#### ＊生ごみリサイクルサポーター連絡会での取り組み

- ・各種処理機器の使用テスト
- ・竹パウダーの使用実験
- ・市のごみ情報紙「エコー」(年2回全戸配布)で発信

### 地域内循環を広げよう

- ・幼稚園や児童館に、講師(長崎の大地といのちの会の吉田さん)を呼んで、生ごみを畑に返し

元気野菜を作る体験を、親子で行いました。

- ・「せせらぎ農園」に続く第2のコミュニティ・ガーデンが6/22にスタートします。ここは各自が生ごみを持ってきて、堆肥ボックスに入れて腐葉土とサンドイッチにするやり方を採用する予定です。(参考:日本有機農業研究会の「堆肥わくわく運動」)

このように、拠点に地域住民が生ごみを持ってくる仕組みを広げていきたいと考えています。

生ごみリサイクルがきっかけで、コミュニティガーデンを始めましたが、生ごみ減量にとどまらず、食育、子育て、CO<sub>2</sub>削減、健康、都市農業、障害福祉など、あらゆる分野に関係しています。まだまだ開拓中です。

### 生ごみの受け皿となる都市農地を守ろう

高齢になって耕せなくなった農家の耕作放棄地があっても、農地法の絡みで人には貸せない、その一方で、市民農園の人气が高く、抽選になかなか当たらない、という状況があります。都市計画法や農地法が遅れていて、うまくマッチングしていません。法律の改正が必要ですが、それを待っていても何もできないので、私たちは「援農させてもらう」という形で進めているところです。

市民が農地を耕せる仕組みがないと、農地はなくなってしまい、生ごみの地域内循環もできなくなってしまいます。最近、農地を守るために、「市民による都市農業研究会」を立ち上げて学習を続けているところです。だんだん活動が広がってきました。

この日は、冊子にした発表資料の他にも、各団体からパンフレットや通信が多数配布され、具体的なヒント満載の充実した交流集会になりました。発表団体の皆さん、ありがとうございました。遠方は長野県からの参加、また大学生のグループ参加もあり、熱気に溢れたひとときを皆さんで共有することができました。当日の内容は、これから記録集にまとめますので、どうぞご予約ください。

まとめ：ごみかん理事 江川美穂子